

湖のほとり

泉鏡花作

—

「何うした、何うして出来た。といふのか、此島
が。然れば、先。」

脚絆、股引、草鞋の旅扮装、小造なのが鳥打を頂
いて踞つてる身體が小さい。斜に革靴を引懸けたが、
これは又度外れに嵩高で、譬へば此人物に釣合の細
君を囊に入れて、口を結へて携帯に及んだやうなり。
着付は綿入に、書生羽織、裾を端折り、縮緬の手扱
帯を緊乎と締めて、眞紅な裏毛の着いた、茶の鞣革
の手袋を嵌めて居るが、新らしく艶なもので美しい
五本の指が、透通つて見えるやうに、月影を浴びて
きら／＼する。と地摺に茂つた蘆の葉に、薰の高い
巻煙草の尖を軽く當てた。

「腹を立てないで、お聞きなさい、よ、腹を立て
ないで。」

「何故、また、」と中折の黒の帽子を深と被つ

て、傍に立つたのが俯向いて言った。此の脊の高いのは運動靴を穿いて、背廣を一着し、新式の外套、袖は羽衣のやうなのを上羽織つて居る。これは近ごろ新たに東京から赴任した、美術学校の教授で、紀夏信といふ畫の先生。

「何故つて、私のいふことが眞面目でない、人を愚弄するものだ何のつて、腹を立つと悪いからよ。尤も、私は恚と信ずる處を疑はないで言ふけれども、怒つちやあ不可ぜ。此石川縣河北郡の八田瀉、其の花の形に似て居るから芙蓉の湖ともいふ、周圍六里の湖の、乾の方に、今朝、突然島が一個湧上つたといふものは、惟ふにこれは、鐵道工事のために、あの俱利伽羅の山腹を崩した、彼處の其の土、」

「お待ちなさい、腹は立てないが、もう分つた。御説は屹度其の土が、えゝと、大なる土龍に變じて、遙に地の中を潛つて、此處に形をあらはしたものだといふ。．．．．」

「能く御存じで、」 といひかけて、見上げる、

見下す、顔を合せて、二人とも莞爾やかなり。

この一人は、東京のなにがし新聞の記者で、號を牛若三郎といふ、十六の時國を出でて九年の星霜を経た、今年二十六の秋、少しく志す事があつて歸省した。北陸道の敦賀線で、午前十一時三十五分、金澤の停車場に着く、直に其の親友夏信の寓居に、草鞋を脱いだ、道中恰も喧しく、八田瀉の一隅に突然島が湧いたのを、今朝未明に發見したと傳はるので、豫て氣脈を通じて居る土地の新聞社の社員に使用を走らして、二三聞合はせる處あり。臆て意を得ると、冠者牛若が其を嬉しがることゝいつたら無い。ちやうど晩秋の好い下物、此地の名物としてある黒鷄の付け焼で、ビールを馳走になつて居たのが、箸を置くと、件の新らしい、綺麗な手袋を嵌めて、脱いたばかりの草鞋を穿いた。好事はこれに劣らず、夏信は江戸兒一で、優美温雅の人品にも肖ず。金澤人は落着いて居て粗相が少なく、火事のないのを殊の外遺憾がつて居るのであるから、後れじとこそ續いたが、いづれも健足、靴と草鞋と相譲らず、河北郡に着いて、爾く八田瀉の畔に立つた頃は、既

に初更しよかうを過ぎたから、それといふと、直ぐすに群むらつた
近廻ちかまはりの漁師れいし、農人のうじんなどは、不殘見物のこらずけんぶつの地ちを拂はらつて、
あたりありに人ひとの影法師かげぼうしもない、城下じやうかのものは明日あす、明あさ
後日つてを期きして居ゐよう、田舎あなは氣きが長ながいから、何なに、又また
其内そのうちにといふのもあらう。

牛若うしわかは衝つと立たつて、

「いや、しかし、其その何なんだ、月明つきあかりで判然はつきりとは見みえないけれども、島しまの形かたちが土龍もぐらに似にて居ゐようも知しれない、土龍もぐらも眠ねむつてる形かたちだ、何でも恁かうい云ことふ事は、弗ふとしたことが縁えんを引ひいて其その要えうに當あたることがあるものだよ。譬たとひ土龍もぐらにやあ肖になくツても土龍どりうと書かくから、然さうだ、龍りうのやうな形かたちかも知しれないね。いまに御覽ごらんなさい、屹度きつと然さうだよ。」

「又卓論またたくろんを承うけたまはります。」

といつて、夏信なつのぶは笑わらつて唇くちびるに手てをあてた。

「何恁麼事なにこんなことは私わたしは無責任むせきにんだ、豫言者よげんしやぢやあないのだから、辻占つじうらが違ちがつたつて構かまやしない。別べつにまた何どうして恁麼島こんなしまが湧出わきだしたらうと云いふ學説がくせつがお聽ききなさりたければ、此處こゝの高等學校かうとうがくかうに來きて居ゐる専門せんもんの地ち質つがくしや學者がくしやで恁意こんいなのがありますからね、それへ紹介ひきあはせてあげませう、何なにしろ故郷こきやうへ來きなり早々さう／＼、火事くわじが無なくツて貴方あなたには氣きの毒どくだけれど、浦島うらしまの殿様とのさまと、櫻さくら

の乙姫、いえ、醫學士の二番娘、待ち給へ、私はこれを加越能のクヱインといひます、あの桂姫と結婚をしたといふし、こゝに又島が出来た、大分面白くなつて來ましたな。」

茲に牛若が、浦島の殿様といつたのは、國內随一の大家長者で、且つ徳望家で、又未曾有の慈善者で、あらゆる乞食を救濟して、之を養ふ者數を知らず、城北の野に矮屋八十六棟を有して、養育院と稱へてある。然ばかり夥しい菜食の民を養ひながら、浦島家に食を乞はんとして赴くのに、隣國他郷の者といへども、未だ一度も姓名を問はれた例がない。従うて此の大慈善者は、己が養ふ者の名を一人として知らないといふので、其の隱徳の大なる一端が伺ひ知らるゝ。單にこれのみならず、橋を架け、堤防を築き、道を拓き、且つ暗がりの小路には到る處瓦斯燈を建てた。其他學生に資金を與へて文學と、政治と、法律と、醫科と、理科と、何等を論ぜず、好む處に従うて學ばせ置くのが、高等學校、美術學校などに數多ある。又名家の倒れむとする者には資本を與へて、祖先の祀を絶たしめず、本堂の修覆、屋根瓦の

寄進、釣鐘の建立、其等にまでも行届く上に、博物館の考古美術部には主なる出品主で、それで年紀三十七といふ異数の名士である。山林、田地、株券を、爾く徳を布くべく多く有した上に、衆が浦島の旦那、と渾名する所以は、仔細あつて此の八田瀉の半を自家園中の一名勝となし得る特權を有して居るからで、向うに一帯の白壁の望まるゝ、湖畔の城廓は即ち其の別業。

「それが何も君の新聞に出して、然ほど價値のあることでもないぢやありませんか。」

と教授は恰も記者の頓興な言葉をたしなめるが如くにいつた。

聲も終らず、

「何、那等が二人が結婚した位、憚りながら私の社では、鼠の嫁入より珍らしくない。また此處へ此の島が出来た位、水道尻へ鯰が泳いで来たとも思はないけれども、線を引張つて、二人が結婚したのと、其の持地だといふ湖の一面に島が出来たのを、結び合して御覧なさい。こりや縫へるでせう。尤も太公望の使つたといふ眞直の針で縫ふのぢやあないの

で、鉛筆えんぴつでも以もつて、僕ぼくが、
と、軽快けいくわいな高調たかてうし子。
」

牛若は教授を顧みて微笑みながら、

「先づ其の天象と人事を、手帳へ恚う、」

左の掌を開けて月に向けると、意氣昂然として右
の人指の先で字を書す形をして、

「さら／＼と遣着けると、ものになります。此の
記事を又待つてゝくれる鬣肩があるのだから難有

い。」

といひながら手を動かすと、手袋は月の影に白銀
の如き指を透通すかとはかりなり。

秋こそ長けたれ、未だ毛皮の手袋を要するやうな
時候ではない。牛若の之は又仰山な。萩に伏し、露
に寐て、沿道の勝地、舊跡を線路に添ひつゝ跋渉し
來つた、草鞋に似ず、服装にそぐはぬ、美しい手袋
に目をつけて、夏信の令閨は文筆に興味を有つて主
人の親友と懇意なので、遠慮なく、前刻、可笑いぢ
やありませんかと、道中衣の綻を縫ひながら逸疾く
尋ねた。

(これは前から御存じの通、私には親もなし、兄弟もなし、小児の内から可愛がつてくれた、年紀もおなじ位の中好しの叔母さんが一人ある。故郷には居るけれど、一家流轉の當時、今居所が知れないから、今度の歸省は、ひらき封の通信を兼て、主に其人にめぐり逢はうと思ふので、逢つた時、此私の手の質が荒れて居ると、苦勞をしたと思つて深切な人が悲しがるから、風にもあてないで大事にする。) といった、日附の一品。

教授は、唯單に、一個、氣輕な、あどけなさうな、旅客でない、牛若が神采躍如たる今此時の風采を、頼母しさうに瞻めて居たが、打額いて又唇に手をあてた。

「で都合よくゆきますか。」
「參りませうとも。丁度何だね、まあ、君が仰向けに寝て居る時、天井の節穴を一ツノ、睨んで居て、其を合せると梅の花になつたり、美人の目になつたりするやうなもんだよ。お商賣でなけりや、那樣づる根性は起しません。いつか君は、佛様の御飯に

お箸が突立つてるのを見て、帆柱を工夫したぢやあ
ないか。御供物だつてたゞはしないんだ。いつて見
りや怪しからん譯だよ。」

「それだつても、事あれかし、事あれかし、と狙
つてる人もないものだ。事となると、これで、随分
人の泣く事もあれば、悲しむこともあるし、又迷惑
する事もありませんからね。」

「其が面白い、いや其奴が結構だ。誰も東京から
名題役者が新下をしたといつて、其で人死があらう
とは思ひますまい、處が、末廣座へ九藏が来て、熊
谷を演つた初日といふのに、可いかい、君、九ツに
なる男の兒と、十六になつた娘と二人、餘りの大入
だつた人いきれで蒸死をしましたぜ。電信の始めて
出来た年には、何だ、電線に凧を引掛けた、其の小
兒の親が首を縊つたね。そりや死んで命乞をした譯
で、實際また電線に妨害をした者は死刑に處せらる
ツて馬鹿な風説をしたからだ。大變ぢやあないか、
あの銅像だけれども、それでもあの公園の銅像を鑄
いた細工人は發狂したしね、辰の口の温泉を掘つた時

は、熱湯に爛れて君、七人死んだ。すべて那樣だよ。
此の天下に新しいものが現れる時には、何にしろ人死
があるものでね、一夜島も一種土地の革命だよ。さ
て、さうなるとおもしろい、づつと氣の利いたひら
き封が此の手で出来上らうといふもんだ、あの島な
んざあ、見給へ、いまに何か不知、始まるから。
と、此の邊に人こそなけれ。

四

仙冠者は傍若無人。

「僕、あへて、人の不祥を喜ぶといふ譯ではない。事の吉なるも亦可なり、但し價値のある報道の出来るのを待つばかりだ。だから、又君の惚話でも謹んで承はる。」といつて、膝に手を垂れて斜に教授を見て一笑した。

夏信はしとやかに其の手を取つて見守りつゝ、
「若い先生、惚話を聴きますか。ぢやあ話ませう、内の細君は君より疾いよ、いえ、そりや何、君は今日着いたばかりだから未だ知らないのは尤だがね。聽給へ、あの浦島に輿入をした新夫人のために、殿様が一花持たせようといふので、新婚旅行も可笑くない處から、丁度湖の其領分内に此島が湧いたのを幸、明日を期して、今度新調した二頭立て、新夫人がこの別荘に来て、恰も天から祝つて貰つたといふ格で、自ら島に名づけようといふのださうだよ。」

牛若は取られた手を抜くやうに拂つて取り、

「えゝ、」

「何うです、これは未だ知らなくツて居たんでせう。」

「申譯のないこツた、知らない、知らなかつた。」

「へい、新夫人が新たに此島に名づけるために新調二頭立の馬車で乗込みますかね、命名式があるんだねや、そいつは宜い。」

「何も無理やりに、其の君の腕で、人事と天象を繋ぎ合せるには及びますまい、丁ともう出来て居りますよ。」

「全くね。」 といつて、牛若は其額を押へた。

「其にまだ、豫て浦島から學資を供給されて、徳なりとして居る、高等學校の學生幾十名、これに有志の學友が加はつて、凡そ百人ばかり、背囊に村田銃、劍を帶して、すべて演習の装で、馬車を送り込まうといふ催があるツていひます。これは、クヰインが新領地に臨むのを守るといふ意ださうだよ。」

「やあ／＼、奇、絶、妙。恐入つたことになつて

来たな。さあ、忙しい。なるほど、新婚、新島、新調の馬車だ。演習で命名式、新聞の一段ひらき封が三枚ばかり直處に出来る。此處だよ、此處だよ、馬車が新しい上に、島が新しい上に、新婚の記念の命名式となると、此國にやあ開闢以來の出来事だ。既に九藏が来てさへ人死がある位なもんだから、こりや今に屹度難有いやうな譯の事が始まるに相違ない。途中で馬車が引くりかへるかな、それとも轍に轢かれる奴があるかな、群集の砂煙の中へ肺病のバチルスが入つて舞歩くも知れず、譯のわからない血の痕が、足跡もまだつかぬ島に滴つて居ようも知れぬ。一寸想像した處で恁麼ものだ。何うして豫想外なことが出来るから、おもしろい。何しろ、島の命名式は可かつたな。畜生、難有いことを思ひ立つてくれたもんだ、嬉しいことになりましたぜ。」

「見給へ、まあ、此の景色は何うです。」

と、酔狂な記者の毒言を、いつもの癖と聞流して居た畫工は翻つて聲を懸けた。

醫王山嵐が身に染みて、月に一點の曇もなく、鯨、

鱸、ニ 麵鮎、鮎、沙魚などの幾十億萬の數が此中に
動いて居ようとは思はれぬ。湖は一面に中高な鏡を
掛けて、兩人は其の周圍六里の大なる月を抱いたや
うだ。乾の天に一星あり、其色緑晶の如く鮮に蒼い
のが、赤錆を帯びては閃く、眞下の中つて、灰色の
大なる鱧の天窓を見るやうなのは、新夫人の來るを
待つ、寂寞とした一種の無名島である。牛若は立直
つて、肅然として見たが、急にまた碎けていった。

「恰もこれ紀夏信の水彩畫を硝子越に見るが如し
だ。」

五

「さあ、其氣で歸らう、もう大分晚いやうだよ。」
といひかけて、教授は衣兜から時計を出して見た。

「待ち給へ。」

「此處に立つて居て夜を明すでもなからう、火事の歸りも淋しいものだが、これは又可恐しく薄寒い、歸らうよ。細君が待つてゐるなどと厭味はいひツこなしだよ。さあ、」

「氣の疾い人だ、一寸、少し・・・」

「為やうがありませんね、明日、又其の命名式に出懸ければ可いぢやありませんか。」

と背向になつてゐる牛若の袂を取つて、引くと、心此時此處にあらずで、

「や、船が出た。いや小船が現れたよ、現れたよ。紀夏信の水彩畫を硝子越に見て居る中、難有いものが出來した、待ち給へ、船だ。」

といつて、牛若は、はたと砂の上に小膝を支いた。透して屹と見ると、其の一點の塵もない、月を浴びた堆い湖心のあたりへ、恰も氷柱の中に黒い蟲が蠢

いてる景色で、一艘の小船。

「始まつた／＼。絲が見つかったぜ、さあ、事件の小口だ。」

「そりや水の上だもの、船も出ませうよ。」と教授は夜寒が身に染む様子。

「ものごとは然う譯もなく出来てるものぢやない。それ、船は、あれ、的面に島の方へ漕いで行くぢやあないか、二人乗つてるやうだぜ。待ち給へ／＼、船頭のやうぢやあない、何うです。え、何うです。」

「判然分りません。」

「そ、そ、そんな、阿漕をいはないで、後生だから、君の其の天井の節穴を綜合する特能をもつて被在しやる、清しい目でよく見てくれたまへ。而して婦人だとか何とか、いつてくれ。これが夜網に出た漁師の船ぢやあ、難有くもないが、あれ、段々島の方へ行くぢやあないか。」

小船は光ある濡れた艶かな銀の盤に軽く浮んで、紫の水をちら／＼と、舷に絡み着けながら、湖の上

を漕いで行く。と鱧の天窓が幻のやうに歩いて近づく。

「何うです、可けませんか、何うにかなりませんか、駄目ですか。」

「何だね、頓興な。」

「いえ、何か變つてちやくれませんか。何うも困つた、能く見えない、女ぢやありませんか——
一生懸命だ。」

「女です。」

「えゝ！」

「一人は洋服を着た男のやうだね。笠ぢやあない、何でも鍔の廣い、帽子を冠つてるのは確ですよ。一人は悪くすると、……女です。」

「むゝ、」といふまゝ衝と立つて、牛若は慌しく、教授の前に一揖した。

「感謝、感謝、お庇さまだ。こりや、大した事になつて來たぜ。えゝ、君、其が其の島の神様だよ。山にでも川にでも、靈妙な魂がある。其の人は島の

靈だ。難有い、北陸道加賀國河北郡の八田瀧に島が湧いて、男女の神が小船に乗つて天降つた。予が目のあたりこれを見る事や。「と、伸上つて見遣つた時は、早や月が傾いて、船は湖心の下になつて居た。其時、島の片端と思ふ處から、颯と白鷺の立つのが見えた。

「あれ、あれ、船が白鷺になつて飛ぶぜ。」

「これ、可い加減にしないかよ。」と、牛若の

背中を軽く打つ、途端に二人は身を開いて、

「今のは？」

「銃聲！」

「あれ、」と、ばつたり、眞砂の中へ崩え込むやう、兩膝を折つて片手を支いた、二つた瞳を熟と仰向けて、頭に近い小さな赤松の梢を瞻めたが、鼓膜を打ち轟然たる響も残らず、松の葉一葉も動かない、唯彼の緑晶色に其の閃めく毎に鏘を持つた、無名島の空なる星は、絶えずきら／＼として、傾いた月の、かすれた輪廓よりも一際明るい。的面に其の星に面を向けた所為もあらう、二十五六の婀娜たる顔が少し蒼ずんで居る。婦人は呼吸を吐いて、繻子の襟を幅廣く掛けた、小紋縮緬一ツ紋の着物の裾を、長く白砂に引いて、持て餘す身を起して立つ、裾にちら／＼、足に絡る長襦袢を乗せて、砂に埋れたのは足袋も穿かずに跣足なり。

片足を爪立て、砂をまさぐりながら、擦ッたいといふ眉を顰め、投出したやうに、

「驚いたねえ、今時鐵砲なんだよ、何のこツた

な。」と何か力なげに、渠は自から呆れ返つたやうに呟いたが、

「あゝ、」

と草臥れた嘆息で、斜に面を低れて、骨のあるやうな肩の上へ頭を乗せると、片頬に張合のなさうな靨が入つて、

「ふう、これでヒヤアもないものだ、かしくさん、何う遊ばした。」といつて頬ぺたで小突くが如く頷いたのは、案ずるに此の婀娜者、自から其名を呼べるこそ。

「お氣を着けなさいましたよ、おや／＼だらしないねえ。」

片手を懐にしてだらりと袖をぶらさげた。指の先で頭をおさへて居る、折り曲げた肱は肉一顆、裂けてゞも居るらしい振のあいた處に、冷たさう。左手で胸を搔合せて、だらしなく左襟に取つて上げると、俯向いたまゝ蹠踵とする趣で、眞砂を踏んで歩き出した。

恚て此の婦人は、其の姿で、其の形で、湖の邊を行くのである。

お断り申しますが、八田瀉は北海の濱續にあるので、八田、根布、元吉、などといふ漁村がちらほらある。在る處を、皆名付けて、元吉の濱、根布の濱などと、云ふ。湖はこの八田の濱に、其の方面の一半を有つ。

暫らく歩を運ぶと、早やものもない廣場に來た、背後は大浪の畝るが如く、ゴムを張り詰めたやうな砂山で、起伏凹凸處々、ほの／＼としてあるばかり。渺とした白砂を、婦人が踏應なく波にゆられるやうに、足を埋み、爪先を抜いて進むにつれて、音もなく荒されたあとを、あとを、平面にするために、ほろ／＼ほろ／＼と崩れ込むで、砂が一ツづつ、働くかのやうに、眞直に果のない濱地の中へ、形の見えぬ糸を引いて行く。・・・女の姿は、宛で婀娜なる中年増の魂が一ツ引添うて、藻脱の夢を連れてあるくやうであつた。

暫く、無心の體で、凡そ四五町も來たと思ふと、弗と其の魂が姿の中へ入つたやうな、婦人は恍惚した顔を上げて、目が覺めた風であたりをニす。背後

には白しろい砂すなばかり。湖うみに星ほしあり、光ひかり蒼あをく、行ゆく手を遙はるか
に横よこにそれた濱はまつゞきに、あからさまな小こ屋やがあつ
て、影かげ法ほふ師しに齊ひとしいのに、一ひと筋すぢ、淡たん紅こう色しよくのあかりが
かゝつたのは、透すき間まを洩もるゝ燈とも火しびである。

七

「釣すとも網をすな、網すとも宿鳥を撃つなよ。

あゝ、あゝ、やれ／＼殺生な事ツたぞ。なまだ、なまだ、なんまみだ、なむあみだ。」と、老一人、板敷に敷いた筵の上に胡坐を搔いて、かんでらの油煙の中に、しよぼ／＼した目と鼻を一ツに寄せて、手先の働を瞳めながら、投網の破を繕つて居る。網は蚊帳の三隅を外したやうに、煤だらけの天井から颯と流れて、圓ツこい親仁が膝の邊に手繰りためられた。

其の繕はうとする處だけ赤々と灯がさして、一面に目のあらい蜘蛛の巣がかゝつたに外ならず、唯四壁ありといふ住居。

五ひらばかり敷いた筵が、一式の寢床なので、こゝで寝れば、こゝで起る、煮る、焙る、食べる、仕事を、親仁は名を権七といつて、獨身の漁師、衣食住とも好放題な活計であるから、餓えず、凍えなまでの稼に留めて、名だたる上手だけれども網を

打たない。一艘所有の小船を漕いでは、終日八田潟の蘆間に釣する、こゝに繕つてるのは頼まれ物である。

熱心に針を動かしながら、

「あゝ、雑魚一尾でも魚の生命だ。これが又生命となると、俺が此年でも欲しいものよ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、釣すとも網すな、網すとも寐鳥を撃つなよ、なまだ、なまだ、此處が教ぢや、南無阿彌陀佛。」

「もし、もし、」

「殺生は罪ぢやけれど、人參買つて首縊る、雑魚一足捕らいでは、食ふことがならぬぢやて。釣すとも網をすなよ、なまだぶ、なまだぶ。」

「何うぞ、一寸。」

「何か、又これを捕つてならぬ譯なら、海をかへ干しても盡きぬほど、天道様が魚をお拵へなされる

法はないてや。」

「一寸。」

「おい、」と答へた、戸外から音訪ふ聲のはずんだ拍子に、思はず權七は返事をしたが、首を捻つて、聞澄して、僻耳だと氣にも留めず。

「獸を打つ奴は、死んで畜生へ墮ちるさうだが、何の此方人等は沙魚か鰯だ。大海の波に揉まれた魚とは違つて、湖の代物は氣が優しくて鈍いもんだ、怨んだ處で嬰兒の亡靈よ。」

「もし、もし。」

今度は權七、何分か耳を傾けて居たから、よく聞いた、女の聲。

「人をつけ、今時分、婦女の來る處ぢやねえ、異な眞似を為やがる。」

「一寸、濟みませんがね。」

「御丁寧な獸だな、何ぢやい、何處から迷つて來

をつたい。俱利伽羅にやあ蛇鱗は居つても狸殿はござらぬさうな、寺中の狐も開化たて宿替をした筈ぢや。川尻から獺でも來せをつたか、何時ぢやと思つて居る、其處所か、忙しい。」とぶつ／＼、云ひながら、早口に、南無阿彌陀佛。

「誰方ですか、何うぞ、もし一寸誰方ぞ、」
と慇懃に聲を懸ける。

「何、誰方ぢや、私ที่บ้านには權七一人と、昔から極つて居るわい、抜作め。勝手も知らずに出て來るやうでは、獸め、橙の数が足りないな。それにしても何の變化ぢやい、此間上つた大鰻の化にしては、汝其聲が細過るぞ、松前から流れて來た膾膾臍ぢやないかいやい。」

「開けて下さいまし、後生です、よう、變つたものぢやあないんですから。」

「何ぢや、甘口な、何奴が又汝の方で、變化でございますといふものだ。これ些と新町通ひの若い奴でも苛めてやれ、尻尾の尖から、天窓の皿な、松の根こそげ草鞋の数まで、丁と御存じの爺さまぢや、

畜生、其手を食ふものかい。」

「可厭だね、まあ、一寸串戯ぢやないのですよ。」

「汝、本氣に誑かさうツてな、はゝゝゝ、止にせい、出直して一昨日來せるよ。なむあみだぶ、なむあみだぶ。」と口癖の念佛で、一向にお構ひなさらぬ。戸外では切なるものいひ、

「開けて下さいな、後生ですツてば。もう寒くツてしやうがないんですから、助けると思つて、一寸、」

「待てよ、何、助けてくれだ。待てよ、」と手を留めて權七は振返つて、聲を高うして、

「誰ぢや、まづ、何奴ぢやい。」

「新町のものでござんすがね、」

「ふむ、何か新町の衆、はての、」と暫く考へる。

「大事な印ですよ。」

「何の、湖の中へ島が涌いた處で、私が家に大事

といふものはないが、此の木兎は小鳥めらがうるさいでの、惚けて取合はずに居たまでぢや。可いわ、其處を開けて入らつせえ。野良犬が、お前、人間のやうに兩足で立つて開けるで、繩で結へて置いたけれども、一昨日の晩の雨風で、他愛なう切れてしまつた、戸に掛金も何にもないわ。」

「おや、」とがつたり、ぎり／＼と戸を開けて、
「御免なさいませよ。」

「や、新町の、道理こそ、美しい狐だわい。」
と目皺を寄せてじろりと見た。かしくは取亂した。
さきのまゝ跣足で、ほつれ鬢。

「おゝ、寒、」と身をすぼめて、一寸あたりを

見たが、
「遅いのに飛だこつてす、申譯のない。」
いひながら、かしくは居處に迷つて、土間の此方に立つたまゝ、夢に襲はれた人の心着いて、なほ覺めやらぬ趣で、疲れてうつとり。

窪んだ目で、かんでらの灯に透して、

「犬にでもおどかされたか、これ、きよとつかず
と坐らつせえ、何の道、鮒や、鯰と雑魚寝をする私
ぢや。狐ともやひでも大事ない。はゝゝゝ、其は些
とも構ひはせぬが、又何の彼のと面倒ぢやで、變な
やうすぢやが仔細は聞くまい。金に詰つた人ぢやか
らというて、私に工面の出来る譯もなし、犠牲にな
らつしやる女ぢやというて、狒々を退治るやうな力
もないで、聞いたとて何にもならぬ。ひもじけりや
食べさつしやい、二椀ばかり餘つて居るわ。附木も
薪ざつぼう其處らにあらう。見さつしやい、竈もあ
るでの、寒ければ燃すと可い。はて、これがお客様
で来ようなら、其方は紋着で丸帯ぢや。然うなりや
あ、肩衣でもつけて鯰の鯨でも壓して置く、跣足で
駈込んだ此方だから、勝手に打ちやらかして構ひは
せぬが、落着いてござるが可いによ、なむあみだぶ
／＼。」

爾した。
婦人は黙つて聞いて居たが、頷いて、心安げに莞

「焦燥つたい譯をきかれたり何かされようかと思

つて居たのに、とつさん何より御馳走様よ。恚云ふ
譯があつて為やうがないんですから、斷めて夜の明
けるまで邪魔さしておくんない。可ござんすか、
頼みますよ。」

「うむ、可し、七面倒臭い、手数さへかけねえ分
にやあ、ゆつくりさつせえ、仔細はないさ。」

と親仁も極めて其の意を得たる面色あり。切つて
放したやうに婦人から目を退らして、仰向いて、網
を引張り、

「なむあみだぶ、なむあみだぶ、はい、はい、
すとも網すな、網すとも宿鳥を撃つなよ。」

「どれ、何しろ、早速暖まらして頂きませう、寒いッたら、もう、」と、胸を張つて肩を尖らしながら、かしくは手を握つて、がた／＼と顫へたが、裾を下ろして、濡れた縁側を傳ふやうに、浮足で土間を拾ひ、屈むで柴を掴むで、竈に臨むと、燃さしだけれどもコツ／＼固さうな薪が二三本、突込むだまゝである。

手を伸ばすと届く處に、恰も附木があつたので、剥いで取り、繻子の帯の結目の片端を、後ざまに抱へ上げながら、灯に附木をあてる。ト青い炎が、小さくかんでらの灯の黒いのと分れて、絲を引くやうに網の前を傳つたが、眞白な掌が竈の中で赤くなるど、柴がニと音して、ちよろ／＼と燃えはじめる。其の前に前髪がばらりと下つた、かしくは投首。

「決して構ふではないけれども、丁度水もはつてある、沸く頃には釜底の飯粒も溶けようで、澁茶でも入れてまゐらつしやい、私も一杯つきあひたいで

の。
「

「難有うござんす。」

「何うぢや、燃しついたか。」

「今に、」

「なむあみだぶ、なむあみだぶ、なむあみだぶ。」

今に、沸くといつたばかりで、火はなか／＼移らない。馴れない故でもあらう。其の風俗でも、大概思ひやらるゝけれど、これはあまり下手なおさんどん。

「あゝ、燻るわい。これ老人の目ぢや堪るものか。吹なせえ、えゝ、埒の明かぬ、はゝゝゝ、妖怪め、汝が尻尾をいぶし出す奴があるものかい。こんた、煙つたくはないか、これさ、こりや堪らぬ。」

「何うして麼怙でせうね。」と美しい衣の綾に、煙を絡めながら身悶する。振をこぼるゝ紅彼方此方。親仁は針の手を留めて、大な掌で虚空を拂つて、

「吹かつせえ、吹かつせえ。こりやならぬ、目も口も開きやせぬわい。」

「私わたしあもう、さつきから目めをつぶつて居ゐるんですよ。」と婦人をんなは顔かほを背そむけて、白しろい咽喉のどを烟けぶりの中で仰あをむ向けに伸のした。

咽むせび笑わらひといふのをして、

「はゝゝゝ、こんた惻りかう怜れんぢや、年としはゆかぬが話はなせ
るな。わけもない、煙けむたけりや目めを塞ふさぐか、世せ話は
入いらぬぞ、來きたり、恚いかう、」と權ごん七しちもかはり者ものよ、
端たん然ぜんとして眼めを塞ふさいだ、二人ふたりとも暫しばらく無む言ごんで、身み
動こきをしないと、森しん。――

風かぜ一陣いちじんさら／＼と來きたり、八田はつた瀉がたを大おほきく一ひと撫なでに颯さつ
と渡わたつたかのやう、沈ちん々くとしてものゝ引ひ入いれらるゝ
如ごとき氣け勢はひは、蓋けだし月つきが落おちるのであらう、世よの中なかも
暗くらくなるやうに思おもひ取とられた、更さらに森しんとする。

耳みみに近ちかく、ギイ、ギイ、と艚ろの音おとが聞きえて來きた。
言いひ合あはせたやうに、二人ふたりは目めを開あけて、顔かほを見み合あ
はして齊ひとしく笑わらつた。

「何なんのこツたい。」

「ほゝゝゝ。」

煙けむりは如何いかなる形かたちをなしてか、戸との外とそに吹攪ふきさらはれて、
網あみの目めも判然はつきりと見みえる、竈かまどの下したには、螢火ほたるびの、其その
形長かたちながく、赤あかきが残のこれり。

「貸かさつせえ。私わしが。」といふので、打うちやり
家やの親仁おやぢや止とむことを得えず、向直むきなほり、土間どまへ足あしを下おろ
すと同どう時に、裾すそを取とつて向むかうへ搔遣かいやる、投網とあみは一ひと揺ゆれ、
細瀧ほそたきの風かぜに靡なびける風情ふぜい。かんてらの灯ひは下したに曲まがつて、
風かぜが又また打うちあたる、湖みづうみに臨のぞむだ小窓こまどの下したで、幽かすかに、ギ

イ
ー

梶かまちの筵むしろに腰こしをかけて、向むかうざまに足あしを揃そろへ、ぐいと蹈ふみ伸のばすと馴なれたもので、鐵かな火ひ箸ばしの長ながく遅たくましいのを巖がんじやう乘にぎり握もり持もつて、踞つくばつてる婦をんな人の、なよやかな肩かたを掠かすめながら、竈かまどの下したへ突つ込こんで、抉えくるやうに搔かきまは廻ますと、これなるかな。

途とたん端たんに當あたつた。舐へき着きつけた。渚なぎさを歩あるく聲あしおと音が忙せはしいのと、寛ゆめやかなると、入いれ違ちがひに、近ちかづいて聞きこえる間まもなく、板いたど戸どが翻ひるがへつて顯あらはれたやうに、朱しゆを灌そいだ、炎ほのほの影かげの投と網あみに映うつつて、明あかるい彼かなた方たへ、附くつ着くいて、並ならんで二人ふり。

男おとこはしつくりした洋やう服ふくで、無む造ざう作さくの身み拵しらへ、鍔つば廣ひろの黒くろい色いろの帽ぼうを目ま深ぶかに被かぶつて、少すこし俯うつむ向むいた目めも眉まゆも隠かくれて見みえず、やゝ面おもやつれをして居ゐるかと思おもはるゝ、頤おとがひに些ちとの髭ひげも蓄たくはへぬ、年とし配はいは三十そこいら。

 筒ぼんつ袴はかまの裾すそを高たか々と卷まきあげて、脚けい絆たんを固かたく緊しめて草わら鞋ぢがけ、銃じゆうを擔になつて、革かは帯おびを帶たいし、白しら鷺さぎを一いち羽は仰あをむ向けにして、黄きいろ色いろい長ながい脚あしを倒さかに揃そろへたのを、桃もも色いろの切きれ

で縛つて、結目長く、之を左手に提げたり。右手をしつかりと衣兜に納めて、身内に隙なく立つた。鷺の嘴は長く垂れて、其の膝のあたりに力なげな、男の脊はすつきり高い。

女は小造で丸顔の、目は鈴を張つたやうで、色がくつきりと白く、鼻が高い。口許がキリ、と緊つて、氣だるみのない額つき、ふつきりした前髪が、櫛の目荒く横ざまになつて、抜けむとして弛んだ投島田の鬘の根を、櫛で留めて居る。狭な處ありながら、品好く、あどけない處の見ゆる、年紀は未だうら若い。赤毛布の雨露に打たれた風な、しよたれたので、すつぱりと體を包むで、小さな草鞋ばかり痛々しいが、件の白鷺の脚を結へた、男が左手の美しい切は、此の赤毛布の下なる幾分の衣の瑞を裂いたのであらう、見るからにあでやかなり。

「これはお客様。強情張つて出さつしやつたが、お案じ申しやしたよ。旦那様は漕げましたでがんすかい。」

ほく／＼もので聲を懸けると、男は手の尖も動か

さなかつた、女は顔を斜にして、眞珠のやうな可愛
い前歯を少し見せて、傾いて、二ツばかり頷いた、
其容子といつたらない。此あたりでは人が耳を聳て
る、生粋の、江戸言葉で、

「うまいものよ、ちやんと漕げて、」

「それは可うござりました、覺束なう思ひました
に。え、何か美事なものが、ほ、う、」と目を
白鷺に。

「これはねえ、」

調子に乗つて言はうとするのを、男は傍から目配
で留めたやうであつた。

美しい星が瞬いた。女は目つきで心得て、

「いゝえ、あの、ドンと撃つちやつたんだよ。」

といひ紛らすが如くにして男を見返り、

「寒いわねえ。」

「暖らつしやりませ、丁度可うござります、これ

へ。

「あゝ、些とばかり、」

つか／＼と竈かまどに寄よつたが、先客せんきやくの婦人をんなに目めを灌そいで、猶豫ためらつて、

「御免ごめんなさいよ。」

「何どうぞ、」といつたばかりで婦人をんなはもの思おもひに沈しづむで居ゐる。仔細しさいあるらしい、其その身投みなげから救すくはれたやうな派手姿はですがたを瞻みまもつて、女をんなは左右さうなく割込わりこむで爰あたらうとせず、手てを毛布けつとから出だしもやらす。

親仁おやぢは一切無頓着いっさいむとんちやくで、

「そして何なには、あの島しまは見みてござつたか。丁度月ちやうどつきも良ようござりやしたし、變かはつた景色けしきもござりませぬかな。」

問はれると、顔を向けて女は一寸眉を顰めた。

「お爺さん、人のものだつて。」

「島かね。」

「然うなの？」

「えゝ、然やうで。」

「をかしいわねえ。」 といつて邪険な顔をした。

「致し方ござりませぬ。尤もな、魚どもは誰のものとも極りませぬ、捕つたものが錢に為やす。湖ぢやからというて、皆ではござりまぬが、丁度あの島が湧きましたあたり、さればこの水を三ツに割つた一ツにばかり、御覽じやしたる、大い城のやうな構の邸のありやす、あすこいら一圓は、浦島様といふ大長者がものでの。」

「だつてこつたわ、私達がねえ、漕着けてさ、島へ上つて見ようと思ふとね、たつた一人で突立つてる書生さんがあつてよ。」

「へえ、島の上に。」

「あゝ、」

「一人で。」

「然うよ。」

「此の夜中。」

「大方まだ居るだらう、明方まで、番をするツて
いつたもの。」

「それは．．．はてね。」

「そして今度、縁組をした新夫人だツてさ、何だ
らう、其の、浦島、それ、其の浦島だといつた、其
家へ縁組をした人が、明日島に名を付けに来るんだ
から、まだ其の女の足が此の島の砂を踏まない内は、
蟲一ツでも上げることは出来ない、一旦名が付いて、
浦島の領分だと極つた上には、畠にしようが。生洲
を拵へようが、各自の好にさせるのだけれども、式
の濟ない内は、何てツたつて上げることはならない
から、歸れ、ツて、然ういつてよ。為方がないんだ
つてね、人の持ものなら手の付けやうはないんだつ
て、あの然うおいひだもんだから、私．．．」
といひかけた顔にいふべからざる不平の色が見え
た。親仁も乗つて出る。此の新しい話には、かしく

も顔を擧げて耳を傾けた。

「それからねえ、」

「歸らう、」と沈んだ力のある聲をかけて、屹と女を見た。男も鬱し怒れる色あり。一言いふと齊しく、親仁の前を横に切つて、大跨につか／＼と戸口に來た。

女は慌しく、

「貴方。」

此方も向かず、猶豫なく、早や戸を開けて、銃口を揺ると、振返つて、

「よ。」

「一寸、御祝儀を、」

「うむ、」といひすてゝ、早やしら／＼とある砂を踏んで、濱へ出た。忙しく懷を搔探ぐると、懷紙に包んだ緋鹽瀬の小さな紙入の中から、一枚の銀貨を出して、筵の上へ、

「あい、」

「滅相な、お前様。」

「それぢやあね、」

と身を翻かへしてかしくには目めもくれず、小造こづくりなのが
小刻こきざみに、つか／＼と、草鞋わらぢも軽かるく追懸おひかけるやうにし
て跟ついて出でる。

「えゝ、これ、姉ねえさん、」

造つくり附つけた船頭せんとうの置物おきもののやうに動うごかぬ親仁おやぢが、そゝ
くさ身みを起おこして戸とに継すがると、後あとを閉しめないで行いつた、
灰ほのかに白砂しろすなの目めの行ゆく果はてに、黒くろいのが二人ふたり、細ほそく透とほる、
今いまが聲こゑで、

さらばといふ間に早はや松まつの陰かげ
幽かすかに見みゆるは菅すげの笠かさ。

と北きたを指さして唱うたうて行ゆく。

其夜、彼の緑晶色の閃々として閃く角に、**■**ある美しい星は、金澤一圓到る處に、心あるものゝ目には不殘見えた。紀の夏信が留守の細君も、想ふに心して之を眺めたであらう。恚るものを見免すやうな婦人ではないから、丁度牛若と一緒に良人が行つた、湖の方にあたつて、輝いて居る事でもあるし。・・

明る日の、島の命名式に臨まうとする、浦島の新夫人桂子も、其方の空を見遣つたに相違ない。

其他、日を期し、時を期して、追つて此の地異の現象を見ようと思ふもの、即ち其の日の奇聞に耳を驚かした一般の市民は、何れも各がしゞ、戸に入る時、門を出づる節、往來を歩く折から、辻にイむにあたつて、皆湖の方を仰ぐと同時に、珍しい星に目を注いだのである。

然も、此の星の眞下にある新島の上に、唯一人、

手を後うしろざまに骨盤こつぱんの上に組くむで、解とかず、前まへ屈かみに
なつて、足早あしはやに那地あつち此地こつち歩きまはつて居ゐる一個この人じん
物ぶつがあつた。

前まへに件くだんの怪あやしい男女だんぢよが、小船こぶねを漕寄こぎよせ來きたり、もの
ずきにも島しまに上あらうとしたのを、頑ぐわんとして留とめたの
が、即すなはちこれで、自みづから進すすんで新夫人しんふじん桂子かつらこの榮譽えいよのた
めに、夜よもすがら島しまを守るのだ、と稱しょうした。

而しかして又また、渠かれは浦島うらしまの主人しゆじんにながしでは無ないこと
を斷ことわつた。元來くわんらい高等學校かうとうがく元來くわんらい高等學校かうとうがくに關係くわんけいのある
もので、明あくる日ひになれば、一隊いったいの校友かうゆうが、戎装じゆうさうし、
前驅ぜんく後衛ごゑいして新夫人しんふじんを護まもつて來くる、其その中なかの一人いちにんで、
詰つまり斥候せきこうの如ごときものであるといつた。

此男このをとこは、其上そのうへに、且かつ一葉いちえふの名刺めいしを衣兜かくしから出だし
て、前まへの偉男ゐだん兒じに渡わたしたが、其それには二上ふたがみ參五郎さんごろうと記しる
してあつた。二上ふたがみ君くんは聞きえた理學士りがくしで、學校がくかうの教授けうじゆ
である。

其それに熱心ねつしんな地質學者ちしつがくしやであるが、此人このひとがいま、天窓あたま

の上の眞直な處に閃く、件の一星には目も留めず、
小さな無人島の上を、恚うやつてせか／＼大跨に、
俯向いて前屈みになつて歩き廻つて居るのは、敢て
材料に供して研究すべき點を見出さうとし勤めるの
ではなく、天がなしたる新しい島の上に、譬へば蟲
一匹でも這ふのがあつたら、取り除けようとして一
心不亂なのであつた。

無人島は其の色灰の如く、其の形鱗の如く、月消
えて黒ずんだ水の上に、漂ひ泛び、一星を頂いて、
一人を載せて、一夜を明した。

「可し、」とばかり、自分の手の赤い色、服の
黒い色。靴の汚れた色を認めて立直つた時、遙に醫
王山の影の如き形に對して、理學士は得意の色を満
面に湛へた。張合のない島守ではなく、思ひ懸けず
も志を全うして、小船一艘追返したのであるから。

理學士は笑を含むで、四邊をニはして、位置も、
方角も、廣さも、たけも、島に懸れる一切は、總て、
腹中に之を藏して、口を開けて、欠伸をした。目を

細めて瞑つたやうな顔色。

靜に歩を移して、斜に浦島の別荘の方に續いで置いた、船の方に行かうとして、弗と見ると、早や明るくなつた、鳥の羽で敷いたやうな、白砂の上に、紅一點。

「や、昨夜の奴が、うむ、鷺の血だな。」

我を忘れた如く高聲にいつて、眉を顰めて、苦り切つた。が、屈んで其時後様に組んだ手を解くと、一掬、血の滴つた砂を掴んで、つか／＼と汀に寄つて湖に臨んで棄てた。紀元千八百九十五年十月二十一日新島出現第二日の朝、水は初めて動いた。細い輪をかいて颯と擴がるのを、及腰になつて瞻りながら、はた／＼と手を拂いて、ハンケチを掴み出して、拭つた後を直ぐ顔に當て、ぐいと撫でて、又大欠伸をした。

「昨夜から居ないんですもの、貴方、御覽の通りぢやあゝりませんか、かしくさんだつて、藝妓ですから、お客もあるこつてす、他へ呼ばれて居る位なら、泊込だつて、今頃は歸らなくツちやあなりません。貴方、もう彼是正午ですよ。」

「ひとりと客の前に腰を据ゑて辨ずるのは、此邊で専ら行はるゝ、モジリと唱へて、半纏を筒袖にした紺の木綿の上羽織に、縺子の襟を掛けた一種の労働服を着けた年増で、名を楨といふ。この鯉昇樓に十有幾年居てつきの下働、二十三人抱への藝娼妓に對する、おさんどんで、姉さんで、且つ新造で。且つをばさんだけれども、肥つては居らぬ。血色の宜しくない、其癖脂ぎつた、額の生え上つた、ねつ／＼ものをいふ。・・・」

「全く昨夜から申します通、御存じでございませう。和倉ね、能登の國の温泉へお客に連れられて参りました。十日といふ約束、一昨日立つたんですが、

いつも長逗留が癖なんでございますから、十日が二十日にならうも知れませんが、何しろ急には歸りますまいから、御不承なすつて、一旦お歸り下さいませやうに。」

客は不品行の故を以て、高等學校を放逐された畠山猛といふ青年の學生で、城下の素封家の次男だが、親にも人にも見放された上に、又此處に來て突出されうとする。一月以前までは、鯉昇樓に於ける唯一の上客であつた。尤も久しい間の放蕩ではなかつたけれど、其の遣り方といふのが極めて尋常でなかつたので。かしくを對手にして、始終四五人の取巻を連込んで、總仕舞の大束で、花を吹雪の如く撒いて、世間を憚らず唄ひ、躍るといふ騒ぎ。暫く三四ヶ月の間に、千を以て數ふるばかりの金子を使つた果が、僅に安下宿に潜んで、縮められて居る身の上。烈しい親もあつたもので、猛が融通の利かないやうに、新聞に廣告をした位だから、貸して當のないものを客にはせぬ。

落目になつて以來、昨夜十二時を過ぎて、突然二

階へ上つたまで、凡そ十數回だつた。かしくに逢は
せるといつて、門まで來るのを、婦人は逃げ隠れし
て取合はず、樓の者は楯をついて斷つて歸したので、
其の來る毎に一枚々々、衣服は薄くなり、顔形は衰
へて、今日はまた見すばらしい、半夏半冬の制服、
黒の上着も處々摺れて赤らんで居る、左の肱の折屈
を小汚い絹の手巾で、緊乎と固く捲いたのは、破目
を隠したのださうな。顔の色も蒼ざめて、薄黒く、
塵に塗れ、一夜を徹した目も窪んで、眦が釣つて居
る。色の白い鼻筋の通つた、眉のきりゝとした、癩
癖は其額にあらはれて、烈しいこと、鋭いこと、不
識庵謙信の佛があるといはれし少年、竄れ切つて、
俯向いて、罪を犯した下士卒のやうな風情で居る。

で、
槓は座も心も動く状なく、いふことも極めて冷か

「ねえ、然やつてお待ちなさいました處が、これ
が日が暮れて、夜になる、夜になれば歸つて參る、
といふのでもなし、お疑ひなさいますにも、貴方、
殿方の癖に、三度まで、小用場をお開けなすつたち
やありませんか。何處にも隠れて居やしませんよ。

これが又婦人の方で、逃げるやうなものを追懸け廻
はして、何うなるものでございますのさ。」と、
づつきりと言つて、軽く笑つた。

「貴方のやうでもない、本當に何うかして被在し
やるんだよ。」

「うむ、僕は何うかして居るから、き様何うかし
てくれ。」と、猛は其の血走つた目で屹と見た。

槓は敢て驚かず、

「へい、」といったばかり、急込む相手の血相を、澄して覗つて差控へる。

「おい、何うにか為てくれんか。」といひながら、猛は唇を震した。

「何ういたしますのでございます？」

「何うかして居るのに、那樣事が分るか。僕には分らないんだ。が、き様何うしたら可いか知つてる筈だ。」

「へい、」と引張つて生ぬるい、此間に口返答をたくらむ奴なり。

「分らなきあ、亭主を呼べ、亭主を。き様に分らなきあ亭主を呼べ、僕が那樣ことを知るもんか。」

「おや、駄々を捏ねて被在しやるよ。はてまあ、恚うやつて那やつて、トかしくさんは内にやあ居ないし、使を遣れる處ぢやあなし、お使ひ遊ばしたのはなくなつてしまつたお金子だし、御勘當は親御様がなすつた事なり、差當り御養子の口を探せと仰有

でもありません。して見れば他に憊うといつて、別に何うもいたしやうはございませんが、」と出まかせに空惚ける。

猛は急込んで、

「那樣事をいつて、構はんか。」

「だつて、何うにもいたしやうはないぢやありませんか。あゝ、何ですね、貴方お肚が空いたんですね。」

「何、」と、有繫に棄鉢の身にも、猛は恥辱を感じて心外な顔をした。

「おゝ、屹度然だよ。肚が空いたのだよ。昨夜から一口もものをあがらないで、廊下やら、室の内やら、駈づり廻つて被在しやるんだもの。こりや堪りますまい、お氣の毒見たやうだ。いえ、其ならば何、はにかまないで、早くから言つて下さりや、お辨當ぐらゐ差上げまさあね、なるほど、お歸りなさりたくも、お歩行が難しいよ、どれ一寸然う申しつけて、」と楨はいつかな動きさうもない負傷兵を持餘して、此處らが切上げ時だ、下へ行つて追出す

相談をと、然ういふ内心、毒口を残してフィ。

あとに悄悄と首を垂れて、猛は身動きもしないで居た。が、何と思つたか岸破と身を起すと、弾き出したやうに座敷から突いて出る。段階子の中ほどで、しごき帯の半纏着、上草履を穿いた媚めかしいのに、ばつたり衝當りさうにした。

「あれ、」といつて、ずる／＼と地獄落に逆戻り、媚かしいのは膽を抜かれた風でべたりと踞る。天窗の上を駈下りて、猛はつか／＼と帳場へ行つて、楨と亭主が額を突合して居る、大火鉢の前へ平と坐した、劍幕の凄まじさ。

「貴方何うなさるのさ。」と此奴ふて／＼しいから、怯ともする年増でない。猛は激した聲で、

「亭主、おい、」

「へい、」と些とばかり打てた形で、慌しい返事をした、亭主名を勘作といふ、日蓮記の幽霊のやうにあはれに瘠せた男でない。腰のまはり十圍にして、猫が乗つて猶餘裕ある、さばかり縁の廣い眞鍮

の火鉢とおなじ高さの膝をば所持する、ふとツ腹の
赤ら顔で、泰然として控へて居る、強慾無慈悲、忘
八に頭取たる見事な資格を有するが、藤八拳が上手
だといふ評判があるだけ、不都合にも、少し人心を
知つて居るので、随分冥加に餘つた此の青年の、爾
き姿を見ては、有繋に聊か罪を知つたか、それ、者
どもで、追出さうともなし得ない。が持餘して居る
處へ、ぢかづけに突かゝられたので、大たぢれとな
り、

「へへへ、御膳なら、唯今差上げます。」

夫れ空腹たるや、動物の弱点である。肚が空いた
 でせうといふ言葉は、如何に、大なる響を以て聞く
 ものゝ耳を聳動するよ。敢て調子を高めるに及ばず、
 空腹なる事を以てして、人を制するのが、この鯉昇
 樓の掟であつた。ちよいと肚が空いたの、或は、へ
 む、いまにひもじい目に逢はうと思つて、貴方お肚
 が空きますよ。

何うも空腹で為方がない、などいふ。言ひやうは
 場合に因るけれども、すべて最終の手段に用ゐるの
 に出來て居た。さればこそ、槓は肚が空いたのだと
 いひ、今又亭主は御膳なら差上げます、といつた。

猛はこれを聞くと、衣兜を探つて、中の空しい、
 革の巻蓑入を出して、投り出す、ぼんといふ音。

「小遣も何にもないんだ、僕は今一錢も持つちや
 あ居らん、此樓のものは何にも食べない、宜いんだ、
 欲くないんだ、那樣事は何うでも構はない、おい。」

き様も人間なら、少しは物を考へて、一寸で可いから逢はしてくれ！」

「何ですね、貴方、さつきからも那麼に譯を申し
てるぢやありませんか、餘り分らな過ぎるよ、へん、
肚が空いてるんだよ。」

「黙れ、手前は何だ。おい亭主、僕が頼む、残念
だけれど、き様に頼むから逢はしてくれんか。」

「いえ、其は何仔細のねえこつてえすが、積も申
します通、温泉に参つたに相違ねえです。つい近
まはりなら使なりとも差立てますが、國が違つてり
や然うもありません。御不承なすつておくんなさい、
へい、濟みませんが、何うも。」

「大丈夫だ、逢はしたつて僕が何うする、何うす
るもんか。其ツ切僕が、」
「といつて、猛は唇を噛
んで、

「僕が、其ツ切、聞け、其ツ切死んじまふまでも
だな、決して、き様達に迷惑は懸けん、蹴られたつ

て、踏ふまれたつて、惚ほれた婦人をんなだ。痛い思おもひひとツさせ
るもんか、大丈夫だいじょうぶだ。」

「何なに又また亂暴らんぼうをなさらうたつて、其それをおさせ申まをしは
いたしませんかね、居ゐねえものはしかたがないぢや
ごわせんか、なあ、お禎まき、こりや旦那御無理だんなごむりだらう。
ごツごツ、」と落着おちついた咳せきをして、口くちにあてた掌てのひら
を前垂まへだれで摺こすつて居ゐる。

「ですからさ、」

「だからだツていふんだ。」と、猛たけしもいふことに
窮きつして、眞似まねの水夫すいふのやうな腕組うでぐみをして黙だまつた。臂ひぢ
を結ゆはへた手巾はんげちの結目むすびめはぶる／＼と動うごいたり。

「なあ、お禎まき、こりや猶且やっぱりそ其なんの何なんだな、」

「はい、」

「御空腹ごくうぶくで被在いらしやる所せ為ゐだな。」

「え、」

「何なにさ、恚いかう其その譯わけをいつてお聞きかせ申まをして、そ
れで御合點ごがてんが參まらねえてえものは、猶且やっぱりそ其なかのお肚なかの
工合くあひに因よることだ。」

「其は、もうね。」

「馬鹿言へ、僕は腹なんざ、空きやせん！」
と耐りかねて腹立たしげにいった。

「あんなことをいつて、何にも召しあがらないで、
其で空きせんことがあるもんですか。御公家様だ
つて、ものは召しあがります。空いたら空いたと仰
有いましなね、男らしくもない、はゝゝ。」

「汝！」

「恐いことね、何も召しあがるものを上げませう
と申したつて、腹をお立てなさることはございませ
ん。」

「これさ、其の腹が空いて被在しやるんでえ、分
らねえ奴だ。」

手を軽く拍つた、ぼん／＼、返事を奥の方で遙に
する。

猛は思はず立上つた。

「もし、唯今御膳を申しつけますので、お静に、
お静に。」

「亭主、」 とばかり息を吐いた、極めて沈静を装つたけれど、胸へ突き上げる癩癩に、いふことも断々で、

「怪しからん、失敬な、無念だ、僕は何うするんだ。」 と拳を握つて打ちわななく。

「猶且御飯をめしあがると可いんですよ。さうするとな、歩かれますよ、歩いて歸られるやうになりますよ。」

「いや、眞に然様でござりやす、何うも仰有ることが、皆其の御空腹から起つたやうでえす。」 と嘲つた笑を含んでいつた。猛は射的の的に立つた如く、身動きもしないで立縮む。

これを又、前に逆落しになつた、媚しいのが、廣い段階子の下の薄暗い處に、懐手で立つて茫乎見て居る。

此日、丁度浦島家の新夫人が島の命名式に臨む日

であつたが、天其の行に幸して、ぼか／＼と暖い。
一點の曇のない秋日和、寝亂れた娼妓の姿こそ階子
の下に薄暗けれ。其の眞鍮の火鉢の縁は、赤いほど
赫とした日あたりで、縁の戸も開けてある。八田瀉
を去ること十二町、神内山の裾なる新町の廓の一構
であるから、庭續の竹垣を隔てた外は、畠中の徑に
なつて居て、水田を隔てた彼方は直ぐ麓で、藁屋五
六軒、鳥指の其間を那地此地するのも、榛の木の小
枝の烏が小首を傾けるのも、皆、轟々とゆるやかに
廻るのが聞える水車の仕懸で働いてるに異ならぬ。

「あなた縁側を、植込に見え隠れ、今手を拍つた亭
主に答へて、ちよこ／＼走りに女中一人、葉蘭の中
の石の手水鉢の前まで進むと、

「あれ、」

「蛇が、お杉どんー」

と二階からと、段階子の下からと、同音に聲を懸
けた。

如何さまな、飛石の間に藻抜けもやらず、秋の末
だといふに、生々しく、銀色に錆を持ったのが、の

たくツてづたりと長い。

「可厭だ、まあ、」

「お杉どん、ソツとして此方へ来るさ。」と薄

汚れた裾を引いて、件の媚めかしいのは、ずっと暗
い中を出た。

「可厭だわ。」

「縮んぢまつたの。」

「はあ、」

「ぢやあ、お前もお肚が空いたんだね。」

二階、下で、哄と聲を上げてぞ笑ひける。猛が蒼

ざめた頬に颯と血が上つて、

「うむ、僕は空腹だ。」といふが疾いか、つか

／＼と駈け出して、礎と庭さきに飛下りた。はずみ

に膝を折敷いたが、其の土のまゝむツくと起つて、

件の黄色蛇を無手と掴む。あれはと見る間に手許へ

引いて、しなへで水手鉢の角へ天窓を當てた、振り

上げた時、蛇は眞直に棒になつて天に沖ツたが、一

打をくらすつて、たら／＼と瀧が落果てゝ消えたやう

に畝りざま猛の右手にぶらり、薄紅梅の口ある頤を

仰向けにして、丈に餘つたのである。

此瞬間、一同目を見合せて、聲なし。其時、うら
少い清しい聲で、何處にか。

然らばといふ間に早や松の影

幽に見ゆるは菅の笠、

と口ずさむのが聞えた。唄が止むと同時に、垣根
の外へ、赤毛布で、投島田の。

「何をなさるんですよ。あら、あら、」

「畠山さん、まあ、」

「まあ、一寸、あれさ、」と口々に皆動揺めく。

「僕は食ふんだ。」といつて、猛は既に蛇の口を三角に開けた赤い中に、両手の拇指を懸けたのである。恰も人が苦しみ悶える時、虚空を掴むやうな手つきで、緊乎。

「お止しなさいまし、お止しなさいましッてば。」

「何うしよう。」

「大變だ。」

「一寸、串戯ぢやありませんよ。」と、槇も堪らないで立つて出る。

「僕は空腹だ、畜生！」

と面も振らず、力を入れた、猛は瘠せた肩を聳たして、

「うゝむ。」

蛇は波線を描いて、鋼が入つたやうに畝り／＼蠢

いた。

「何うかしないぢやあ、あれ。」

「親方！」

「旦那、そりや、悪うげす。」 と小山の如く火

鉢を離れる。

「畜生！」 と力聲を入れて裂かうとしたが、岩

見重太郎でない。

魔にこそなつたれ、舊これ蒲容柳質の公子、猛は

力に餘つたので、

「えゝ、恁麼ものを。チヨツ。」 地蹈鞴を踏ん

だ悪鬼の面相、ぶる／＼と頬に筋あつて動く見え
た。

天窓を口の端に齧らして、きり／＼と鳴らした歯
で、蛇の口と食合つた、下頤を前歯に噛んで、ぐツ
と緊めながら両手を上頤に掛けると、座に在るもの
皆色を變じた。

垣の外にゝんで、摺寄り／＼、ひたと身をあてゝ、
目も放さず様子を覗いた旅の女は、此時、鈴のやう

な目をニつて、熟と瞳めながら一步退いたが、赤毛
布を揺上げて、少し俯向いて、口を蔽ひながら、又
差寄る。

途端に、喰裂いた蛇の骸は、ひよろ／＼となつた
が、齒でかつ切れた猛の唇は血に染つた。

「様を見る。」といひさまに、蛇を地に擲つた
が、もの凄じい顔に笑を浮べて、

「旨い。」
と片手で唇を拭つたのを、弗と見ると掌は血に塗
れた。五本の指の爪の間には、青黒い其の蟲の鱗が
一一ツづづ着いたであらう。

面を上げて見たものはない、二階も寂然、人数も
少なし、家の隅々は皆冷く、居合すものは寒さを感じ
た。一體湧上るやうに陽氣な樓なんだけれども、
かしくは避けて此處にあらず、藝者達は、いづれも
今日の命名式を見物に出掛けて行つた。こゝには限
らず、家一軒に、二三人、人出のないのはなかつた
位で、残つてるは病人と、娼妓と、皆顔色の悪いも

のばかり。

猛は血に染つた掌を、白い筒袴になすりつけると、また垂々と湧出るのを、再び押拭つて、更に筒袴にこすりつけた。見る間に處々血に塗みれたが、拭ひながら、なすりつけながら、ふら／＼と立つて來ると、思はず左右へ開いて退つた、亭主と槓とが間を抜けて、天窓重たげに、足もしどろ。中の間を抜けて、式臺へ出たが、土間へ足を投出して、ばつたり腰をついて、仰向けに倒れた、起返らうとして又倒れた。顔を横ざまに、押着けると、髪は蓬々として板の上に垂れた。と見ると、矢の如く立つて、すぼりと抜けたやうに門の戸を出て、眞書間の傾城町を、よろめいて行くのが、格子戸越に見えたので、勘作も槓も吻と呼吸。

さらばといふ間に

とまた口ずさんで、旅の女、くるりと彼方向いて行き過ぎる。

「二上だ、之は、二上だ、二上だ、二上先生なんですよ。」調子づいた呟きやう、うそ／＼、床几の周囲を抜足で歩くのは、牛若三郎。此人に御苦勞様なぞといふことはない。今日も又態々草鞋穿で見物に出掛けて来たので、淺野川の下流に沿うて、金澤の町盡から河北潟に通ずる一筋路の堤防の下なる葭簣張の出茶屋に休んだのは、正午少し過ぐる頃。

牛若は最初此茶店に入つて来た時、先客があつて、二人、一人は一脚の床几に腰を掛けて、饅詰の冷酒を傾けて居た。上衣は黒く、筒袴に白の學校服、其の處々斑々として紅を染めたのは確に血、顔色も尋常ならず、喧嘩の中から身を挺したのか、然らざれば泥酔して傷ついたものと想はれたが、烈しく殺氣を帯びて居て、悪くものでも言はうものなら、相手は擇ばず、食つても懸りさうな劍幕、これには敬して遠ざかつて、此方の床几に休んだが、いま一ツ臺の上に、仰向けに高躰で寐て居る人物があつたのを、間近に瞻つて、三郎が、思はず立上つたのであつた。

其睡眠の中に在る人の、夢に浮かれ出したる魂が、
本心に戻つて、戸惑をして入口を忘れた形で、右見
左見ながら枕頭を那地此地。若い記者は嬉しげに、
又珍しげに莞爾々々して、

「希代だよ、妙極まる。寐てるから不思議だ、鼾
を掻いてるから可い、面白い、難有い。よく寐て居
やあがら。何うだ、まあ。」

と獨言をして居たが、恚ることを、獨で思つてる
のに忍ひなかつたので、竈の前に踞つて、火を吹い
て居るのを呼びかけた。

「婆さん、一寸婆さん、婆さんや。」

「はい、はい、はい。」

返事を續けざまにを三ツする、蓋し其だけ呼ばれ
たので。

「茶を入替へて進めますかね。」

「何、其の事ぢやあない、一寸、此處に恚う暢氣
な鼾を掻いてる、手足を伸ばした、衣兜から時計の
溢れ出した、髭だらけの顔の、此の妙なものを何と
思ふ。分るまい？　これは猶且人間だ。」

「へい、」と呆氣あつげに取られて火吹竹ひふきだけを杖つゑ。

「驚おどろくなよ、何も人間にんげんだつて吃驚びつくりすることはないぜ。人間にんげんだけれども、人間にんげんの中なかにも、其その二上ふたがみ三五郎らうといふ學者がくしやだ、先生せんせい様さまなんだ、可よしかい。」

「へい。」

「先生せんせい様さまなんだよ、可いいかい、二上ふたがみといふんだ、僕の友達ともだちさ。五ツばかり兄貴あにきなんだ。暫しばらく逢あはないで居ゐたんだが、些ちと老ふけたばかりで、全まく其その人ひとさ。」
本當ほんたうにゆつくり話はなしす氣きか、腰こしを掛かけて卷まきたはこを喫すひ始はじめた。

突拍とつび子ようしもないことを言いひ懸かけられたが、婆ばあさんは又また大おほに安あん心しんした様子やうすで、北叟ほくそ笑そみつゝ、

「先生せんせい様さまかね、いやもう、其それなれば宜よろしうござりまするが、私わしは大おほきに其その何なんでござりまするよ。」

「奈何どした。」

「いえ宜よろしうござりまする、もう其それならば宜よろしうござりまする。」

「何なんだ、何なんだ、奈何どしたのかい。」

「いんえ、奈何どもなさりませぬが、今朝けさね、お前まへ様さま、店みせを開あけるか開あけぬのに、づか／＼とござらつ

せえて、茶は沸ぬ、冷で可いと、小壇を二ツばかり
お明けになりますと、既に高躰ぢや。夜一夜寝なさ
らない様子、お前様、お友達ぢや、濟みましねえけ
れども、婆は又夜働をさつしやる、其の泥坊衆かと
思ひをりましたで。」

牛若驚いて、

「おや、おや。」

「薄氣味も悪し、お前様、係合は恐れますから、早く去んで貰ひませうと思ひましたで、三度も四度も起しましたけれども、生返事一ツさつしやりませぬ。正直な人でないと思や、手をかけるのも汚らはしうござりますなり、巡査にいひませうにも、此年紀をして後生の悪い、婆にや孫もござりますものを、繩つきは出たくござりませず、恁麼小蔭で老婆が行つて居りますで、お客は別になし、偶に被入しやりや、」

といひかけて、件の學生をじろりと見て、眉を顰め、

「此方様だの、お前様だの、何だか變妙な人達ばかり、」

「え、僕まで仲間か、これは御挨拶だ。然し、」
 といひかけて苦笑をして、牛若は鼾の理學士の寝顔を覗いた。

「これだね、泥坊と間違へたのは。」
 婆は氣の毒さうに、然も眞顔で、

「えゝ、盗人も親方ぢやと思ひました。」
「はゝゝ、猶且下宿屋の難は免れる人だよ。」
「何でござります、」 と、これは婆さんには通じなかつたらう。

「いえさ、仰向けに寝た顔は一寸見違へるものだといふことさ。僕がね、一度然云ふことがあつたよ。餘所で大ひつてんで困つてる時に、拂が出来ないで、下宿屋を追出された、それだけぢやあ濟まないや、知つてる奴の長屋に潜んでるのを、附けつ、廻しつ、滞の催促をする。愈々切羽詰つたので、亭主に出會つては叶はないと、うつかり歩くことも出来ないで隠れて居たがね。他の又友達の處へ、成らない相談に行つて、寝轉んで居ると、何うだ、借のある下宿の亭主がこゝへ用があつて、のこゝと入つて来て、部屋が狭いんだから附着いた横腹の處へ膝ツ小僧を押しつけて坐つたぜ。もう百年目だと覺悟を極めたが、其の亭主の用といふのは、外ぢやあない、豫て懇意な事を知つてるので、僕の番地を聞きに来たのよ。へい、何處に被在るか分りませんか、那の人といふものは、とそれ辨じます。友達も氣を利かして、空

惚^{とほ}けちやあくれたんだけれど、寝^ねて居^ゐる此^こ方^ちは脂^{あぶら}汗^{あせ}よ、つい氣^きが付^つかずに歸^{かへ}つて了^{しま}つたが、天^{てん}の助^{たす}けだと思^{おも}つて、身^み投^{なげ}を思^{おも}ひ止^{とど}まつた位^{くらゐ}だ。權^{ごん}現^{げん}様^{さま}が藥^や研^{けん}を斬^きつて、腹^{はら}を切^きるのを止^やめにしたとおなじやうなものだよ。」

「それは、はあ、矢^や張^{はり}泥^{どろ}坊^{ぼう}と間^ま違^{ちが}へたゞね。」

と警^{けい}句^く一^{いつ}喝^{かつ}、婆^ば子^し其^その齒^はの抜^ぬけた口^{くち}を開^あくこと大^{だい}なり。仙^{せん}冠^{くわん}者^{じや}又^{また}苦^く笑^{せう}して、

「酒^{しや}落^れるない、はゝゝゝ。」

「いんね、お前^{まへ}様^{さま}、人^{ひと}品^{がら}が佳^ええ、案^{あん}じさつしやりますな、泥^{どろ}坊^{ぼう}とは見^みえましねえがね、其^その目^めつきをきよろ／＼するのを止^やめさつしやらねえと、恚^{こん}麼^な人^{ひと}出^での烈^{はげ}しい日^ひにやあ、掏^{すり}賊^りの小^こ僧^{そう}と間^ま違^{ちが}へられますべいよ。」

「驚^{おび}いた。こりや、當^{あた}るべからず。」

というて慨^{がい}然^{ぜん}として面^{おもて}を背^{そむ}けて見^みて、

「まだ、恚^かうだよ。」

理^り學^{がく}士^しの枕^{まくら}した床^{しやう}几^ぎと葭^{よし}簀^す一^{ひと}重^へ隔^だてゝ、外^{そと}は一面^{いちめん}の薄^{すす}で、其^{その}中^{なか}を人^{ひと}を、乗^のせては小^こ船^{ぶね}が通^{とほ}る。これは

土手一ツ彼方を流るゝ、大淺野川の小さな支流で、
此の先の一村は、醤油を産して、恰く市内へ供給す
る、其樽を積んで町端まで運漕する多くの船が、今
日は不殘見物の人を載せて漕いで下るので、蝙蝠傘
を広げたのなぞが、低う薄と摺々に流れて通る。醬
油問屋の壮佼は、花主先、其の知己などを乗せてる
ので、いづれも向顛卷、肌脱で大景氣。酔つた船頭
のであらう、棹を刎ね返した、水を切つて颯と雫。

牛若慌しく體を捻つて「驚く。」

「ふツ、」と、息をして、今の雫が飛んだらう、
 理學士は夢中で顔を撫でた。

同時に一ツ船が着いた。間に合はせの揚場は、問
 屋々々が一ツづつ持つて居て、堤防の下は低いから、
 無造作に船を着ける、此の出茶屋の傍も丁度其の揚
 場である。牛込のやうな柳はないが、ぐツと當ると
 水を押して、地の上へさら／＼と波が溢れる、と倒
 れ伏す、薄の上に、穂の繁き裡を突抜いて、舳が空
 を指して、目の先の明い葭簀の外へ顯れたと見ると、
 男女打交ぜて七八人、赤いものを閃かして、女は白
 足袋、男は黒い帽子に紺足袋といふ一連の同勢、ど
 や／＼と下り立つて、堤防から類の薄原を、斜に前
 後して上つた。

少し後れて、船を乗りすてゝ出た、尻からげで、
 跣足に藁草履を穿いた筒袖の、問屋の壮佼、重詰と
 見える萌黄の風呂敷包を背負つて、急いで行く。

「これさ、休んでござらつせいや、喜藏どんよ。」
 「今日は市の旦那衆のお供だい。」と、足も留

めない。

「何うぢやの人出は、」 と呼び懸けて婆が聞く
と、

「此通りよ。川へ一杯で堤防へ切れ込みさうだい。
海嘯だ、海嘯だ。」

といひすてゝひた走る。

「然やうか。根ツからはや、」 と何かぶつ／＼、
三個の異體な客ばかりを抱へて居る婆は、其の不平
大方ならざるなり。

「恁麼時居すわりは詰りましねえ、家業なりやこ
そぢや、孫が可愛いで稼ぎをりますが、然もなければ
は出て行つて、浦島様の夫人が拝みたい。人も出盛
りと見えますに、ほんの事でござります。恁麼人出
は私が生れてから三度目ぢや。御門跡様が木場様に
泊らつしやりました時、藩主のお友達で松若様が、
江戸からおいでなされました時、錢屋五兵衛の家の
衆が、礫に懸らつせえた時とか、それだけより覚え
ませぬ。お前様も御見物でござらうに、お連様なら
起して上げさつしやい、やあ、其の泥坊・・・

うんや、はい、お客様を、」

と諷するが如くにいつた。牛若其意を得て、心に

可笑しく、

「あい／＼、唯今起しますがね、此人は癖として、

お前、寐起にやあ一時宛氣が違ふよ。」

「え！」

「君、失敬、」と、先から手酌で壇詰の冷酒を

しツきりなく、苦さうに傾けて、然も不快な様子で

あつた、學生が突然聲を懸けた。

「失敬。」

「私……」とばかり、有繫に戒心して、酒

落たる仙冠者、薄氣味惡げに謹んで應じた。

學生はとろんこの目を据ゑて、

「失敬する、突然ですが、君は外國の人でせう。」

「何ですツて、」

「其です、其がです、其の總ての會話といふものが此國の人ぢやあないんだ。唯今、失敬、君は外國

の人でせうと、僕が尋ねた、然うすると、（何で

すツて）とやつたでせう、これを此處い等の奴な

「失敬する、僕は恚うやつて飲んでます。一杯差上げるんだけど、打明けて言ひますが、僕實際一錢も持たないで、無茶にやつてるんだから、那樣ものは可厭でせう、堪忍したまへ。」

といつて、目つきに淋しげな笑を帯ひた。猛は杯を下に置いて、膝にちゃんと手をつき、一揖して舌なめずり、

「僕は昨夜ツから、飲みたくツて為やうがなかつたんだが、然る處ぢやあ、僕意地に飲まなかつたんです。え、外國人、外國のお方、君は此國の人ぢやあないんだからいひますが、下らないんです、からお談になるんぢやあない。」

此の婆さんを始めだ、皆馬鹿ばかり居るんだからね、サウキだのウサキだの、ゴザリミス、なんてことばかり言つてるんだ。

君分りますか、分りますまい。これが分るやうぢやあ不可ない。僕のやうなものになツちまひます。僕はね、君、退校させられたんです、錢を使つたツ

てね、美人の膝を枕にしたといふ故を以て退校を命
ずるものなりと來ました、宜しい、大賛成、退校、
結構、エイ來た、なんてツたやうな譯のものです、
はゝゝゝはゝゝ、と破顔して高らかに笑つたが、
急に、其美しい額に皺を刻んで、

「下らない、何だ、誰が、那麼奴に惚れるもんか、
元來……」と、語を改めようとして呼吸を
吐いた。

「此國の奴等、何だと思つてるだらう。僕は土着
だけれども、大嫌だ。癩に障る。君、聞きましたか、
今も此の婆さんがいつた、松若様ツていふのはね、
面の長い奴です、長いこと凡そ然やう、此壇位あり
ませう。」と横にした酒の壇を慵さうに指の尖で
ついて見た。少し轉ががったのを、も一ツ突くと、
礎と土間へ落ちる。

興覺顔をして居た婆さんは、慌しく寄つて、壇を
拾つて、睨めつけながら、ちやつと袖の下に秘し、
飛退く。

猛は陶然として構ひつけず、意氣益々昂つて、
「之でも壇の中は正宗ですから、ぴりゝとして可
い心持だ。けれども、其の長面はね、大々の甘えん
です、甘茶の最たるものだ。然り而して色が生ツ白
い、白く且つあまくつて長い面だから、山川白酒と
いふんですな、何うです。」

嬉しげに渠はにつこりと笑つて、
「其の山川白酒の殿様となると、さあ大變、殿様
だといふので、此國の奴等、皆宛で狂氣だ。いまだ
に土下座をして、這ツ面の長いのを拝むんだ。難有
がることツたら、君、家の親父が（何うだ、若殿
様はすべて厠で白羽二重の切でお拭きなさるといふ
ぞ）なんのと、眞面目腐つていふんだ。」

馬鹿野郎、那樣親仁は氣に食はねえから、勘當宜
しい、難有くお請仕るの處ですな、僕一錢もなくな
つた。

君も先刻下宿を追出された事があるといひました
ね、外國にも那樣ことがあるんですか、不思議なも

んだ。

下宿を追出されて、一錢もない、妙なもんだ、皆で空腹だらうツていつた、僕は何にも言はないんだけれども、ひだるいか、飯を食へツて言やがつたが。何うです、君にも然う見えるんですか。為方がない。僕、實は、空腹だ。だから蛇を裂いて食つたんだ。蛇を食つたんだ。君、僕は何うかして居ますか。」「といふ時、目に一杯の涙を湛へて、沈痛禁じ能はざる趣であつたが、擡げてぢつと牛若を見て居た顔を、掌に伏せて俯いた。

仔細は解せず、其状、棄て置かれずあはれを感じて、仙冠者は、とんと木馬を御するが如く、兩手で掴みながら床几の脚をずらして寄つた、端の方を引跨いで、

「何うなすつたんです。」

「何うするもんですか、誰が惚れるもんですか、君、外國の紳士、僕は唯癩に障つたからだ。浦島が何だ。畜生、那の偽善者が何だ。然云ふ盲目だから駄目だつていふんだ。」

乞食を養つときやあ、慈善者だと思つてる。國利民福を呼ばはつて見せれば、德行ある君子と心得て、馬鹿ども。

第一君、奴に三舎を避けて、馬車に敬禮しなければ、市民が一致して知事を追出し兼ねない人望だ。

何うです、僕大に説がある。詰り論究すれば、この八田瀉の彼が領分の内に、新島が湧いたのは、天、率土の下に、浦島が屍を葬るべき墓を下し給はつたのである。

といふ説があるんだ、僕はちやんと心得てます。大に説があるんだけど、外國の朋友。

聞き給へ、月は何處にもあります。あるけれども、
書間は分りますまい。

然るに此國に限つちやあ、晝夜ともに月と仰ぐべ
きものがあつた。一人の美人だね、僕が之に惚れた
といはれたつて敢て恥ぢない。見る人の心々だけれ
ども、月を美しい、と思はぬものがありますか。皆
然う思ふ月の如き美人があつた。

其が君、人のものになつたんだ、浦島の奴に占め
られたんだ。

心細いことは世間にいくらもある、けれども月が、
もう此世に見られないといふことが極つた時、橋の
上、山の端、谷間の清水に、猛獸の眼に、草の露に、
花辨に、すべて何等のものにも、光を宿さない。三
百六十五日を、幾まはり、闇夜ばツかりだとなつた
ら、人は何の位寂寞を感じるでせう。」

「もしも、をばさんが死んだといふことを、僕が
聞いた時とをんなじだらう。」と牛若は忽ち感に
打れて、引入れられるやうに耳を澄ました。

「僕は堪へられん、殆んど堪へられん、いつでも月を見て、あゝ美しいと思ふ毎に、馬鹿な話ですが、もしも永遠に之がなくなつたら、甚麽に心細いだらうと思つちあ、ぞつとした。落着いて快い心持になつてはかり見て居られなかつた。

僕は氣が違ふだらうと思つた、然るに其の美人が君、浦島のものになつたんです。」

「なるほど。」

「僕は丁度豫想して居つた月がないものになつた時とおなじ心がする。耐らん、可かんもう、無茶苦茶に騒いだが、君、外國の朋友！」

と呼びかけた、眦を釣つた、血色凄く、
「悔しい、僕は悔しいんだ、悔しいんだ、君。」

誰が藝者如きに惚れるもんか、畜生、生意氣だからな。僕一番、那の浦島を暗殺する議論があるんだけれど、既に美人と縁組を極めた上は、何か其事に關してだ、平たくいへば戀の遺恨だね。

戀の遺恨で以て、僻をいふと思はれちやあ恥辱だから。

何、それと、又僕の説とは自から道を二つにして、
元素が違ふんだけれども、可かん。

馬鹿どもにや分らんから、一人女を拵へて置いて
だ。最早其事には心懸のないやうに人に思はして、
然る後に、大に、破天荒の説を發表しようと思懸け
たから、唯國內一の賣れツ妓を擇んだ。妓流三千渠
がために顔色なきを如何といふかのに目を着けて遣
りかけたが、君、僕は自分で恁程までに價値のない
ものとは知らなかつた。」と愁然として差俯向く。

「まあ、君、聞かしたまへ、聞かしたまへ。可いから、それから、え、え。」と牛若は慰め、賺し、且つ勵ますが如くにして、感慨胸に餘つてものいふこと自在ならぬ、硬き舌と、其心を和げようとして勤めた。

猛は又息を吐いて、
 「君、其の藝者は僕を何とも思はん、殆んど小兒扱にしやがるんだ。失敬極まる。だから僕は金力を用ゐた、あらむ限り錢を使った。到頭退學、勘當、もう可けない。

僕はね、餘り悔しいから、樓へ押掛けて行つて最後の談判したんだ。昨夜から一目も寐ん、寐られるもんですか君。何うしても逢はさんから、無念だつたけれど、手を支いて君、獸のやうな奴を拜した。

是非頼む、掴まへたら亂暴でもすると思つたらしいから、譬ひ蹴られても惚れた婦人だ、手出はせぬ

といった。

馬鹿をいへ！

掴まへたら、最後だ、僕は殺しませんが、腕力を用ゐて、彼奴が咽喉を扼めて苦しませる手段に出てやらうとして居たんだ。

而して望む處は、

（貴方は私には過ぎた方です、勿體ない。）

と一言、城下の盟をなさしめようと決心して居た。又最初から其の主義で遊んだが、駄目だ。

力を奮ふに處なくして、嘲弄侮辱、殆んど無神経になつた意の僕にも耐へ切れんから、那の藝者を捕へる手で蛇を掴んだ、而して其の咽喉を扼める筈だつた腕力で口を裂いた。君、而して其肉を噛んだ。君、變ですか、僕は何うかして居るやうですか、言ふことが變ぢやありませんか。」と目をきよろ／＼として、いふべからざる悲哀と、不安の色を現した。

「いゝえ、まあ、可い、可いから、話したまへ。其で、」

「いや、もうしゃべらない。信友。君は外國人だから僕はこれだけのことをいつたんだ。もう胸が張り裂けるやうなのが少し復つた。謝す、謝す。」
と首を投げるやうに一禮して、

「何、君、藝者一人服し得ないものが、何うだ、説も何もあるもんか、いひ出しや輕蔑される。」

「決して、僕は、決して何ですから、」

「否、僕大に外國の人に恥づるから、敢て説はん。乞食の語から哲理の發見された例がない、下宿の二階で國家を論ずると同一です。卒一名左右すること出来ないので、戰を論じて氣を揉んだつて何になる。敗軍の將は俱に兵を論ずるに足らず。」

朋友、僕は情婦が欲しい。然うすりや、浦島に對して、僕の有する説が、一種の嫉妬から起つた事は思ふまい。

朋友、僕は金子が欲しい、然うすりや、浦島に對する説、即ち……

——新島は天が渠に下し給へる墳墓なり。——

といふ説に服さしめて遣るが、不可ん。情婦と金子の欲しいといふ者が、此状で、何うです、藝者一人を制し得ない。

既に其の藝者に對するさへ、僕は生命を賭にした。況んやだ。生命は入らぬが、欲しいは情婦と金子です。情婦と、待ち給へ、情婦と金、生命は入らぬが欲しいものは、待ちたまへ、生命は入らぬが持たないものは、金子の生る木と、情婦人。」
と、一聊の句を口に綴様つて猛は呵々と笑つた。

「生命や入らぬが持たないものはだ！　こら！　面白い。生命や入らぬが持たないものは、こら！　といふ時、一度打はづしたが、ぶツ斷つて棄てるやうに左右の掌を礎と打つた、同時に衝ツと立つて、
「こらしよ！　こら、生命やいらぬが、」　といひながらよろめいて出る。堤防の薄に、姿がもつれて、穂に枕して横倒れになつたが、むくと起きて、
獵犬の如く上へ飛び上つた。

「それ、」　と、續いて床几から離れて立つ、牛

若わかの袂たもとに慌あわしく縫すがつて、

「助たすけてくれつしやい、私わしは何どうなりますね。此この年とし紀ぎになつて始はじめてぢや。酒さけは飲のみ倒たふされます、而そしてあの寐ねてござる人ひとを何どうしてくれさつしやる。泥どろ坊ぼう、いんね、はい、旦那だんな様さま、旦那だんな様さま。」と泣なき聲こゑを發はつして武者むしや、ぶりつく。

「待まちねえ。」といひざまに一枚いちまいの銀ぎん貨かを握にぎらした。

「可よからう、何どれほどの事ことが起おこるか、試ためして見みよう、起おこさずに打うつ棄ちつて置おけよ。」

二十四

生命や入らぬが持ちたいものは、

金子の生る樹といろをんな。

「畠山だ。」

「あの畠山だ。」

「何だ、」

「狂人か、」

「畠山だ、」

「畠山か、」

「狂人だ。」

一人々々振向いては流晒にかけ、振向いては流晒に
かけて、一隊三十名ばかりの前駆が通つた。

渠等、戎装せる學生は、互に威儀を保ち、各自慎
重の態度とを、堤防の兩側に群り立てる見物に示し
ながら、武歩を運ぶのであつたから、纔に口々に囁
き呟いたに留まり、敢て一人列を亂して、此の失態
極る同窓の舊友を突倒して、路を清めむとはせず、
却つて汚はしいものゝやうに避けて爪弾したのみで
あつたゝめに、押せば倒れさうな千鳥脚ながら、猛

は路幅の細い中央に突立つて、一行が進むに連れて、縫ふが如く五六歩よろ／＼と續いたが、足踏をして、ぬつくと立ち、的面に午後二時半の其日の太陽に面を射られて、赤く、仰向いて、口を開けて、大聲にまた唄つた。

生命やいらぬが持ちたいものは、

金子のなる樹という女。

「こら！ こらい！」と傍目も觸らず、足踏をして拍子を取つた。

「危い！」と一喝して、二頭の馬を取留めたは、非職陸軍大佐、犀の眼、豹の頭、朱書の鐘馗の如き面に銀髯を貯へたる老將軍、浦島に此の擧あるを讚し、新夫人の名譽のために自ら馬を御して居たのが、あはや、其の肩に前足を掛けむとした手綱をしめたが、思はず汗になつて、額を拭つて、叱咤した。

「退け。」

見物は一齊に動揺めき立つてぞ犇きたりける。

「こら！ 生命やいらぬが持ちたいものは、金子
の生る樹といるをんな。こら！」

繰返して又唄った。

「生命やいらぬが、こら、持ちたいものは、・・

・
・
・

と手巾で結へた手を振つて、血だらけの體で、交
る／＼足を上げて、どさり、足を上げて、ばさりと、
地を踏みしだいて前へ出る。

馬はじり／＼と進むだ。氣早な、老將軍は聲を荒

げ、

「蹴殺すぞ。」

猛はにや／＼と笑つて前後を知らず、

「こら！ こら！」といつて、ぴしやりと額を

打つて、又にやりとする。老將軍は御者臺にすつく

と立つた。

「南無三、事件は難有いが、此男は殺させまい。」

と、人立の中から牛若つか／＼と出る、今は恚う

と、殆ど同時に、列の最後なのが二人取つて返した。

其時、ひらりと馬車の中から、薄紫、濃い紅、衣の綾、目覺しい、高島田にふつさりと、銀絲を掛けて結つたのが、飛ぶやうにして下り立つた。見る目もさやかに、すら／＼と来て、猛に近寄る。手に小さな桃色の手巾に包むだものを捧げて居た。これを見て、未だ一言を發する者のない内に、腰元は逸疾く、猛の上着の裾を取つて、そつと曳いて、道を退けさせるると、思はずよろ／＼として、稍路を開く。

二頭の馬また一進せり。磨硝子の窓は、猛と摺れ／＼になつた。

「新夫人が、貴方の、其の、金子の生る樹になりませうツて。」

「貴方、あの、お怪我を遊ばしますなよ。」

と言ひながら、呆れて腋を開けて、其處から魂の
 抜出した手を擴げて、茫然たる、猛が衣兜の中へ、
 心利の腰元、件の小包を推入れて、

「さ、御入用の節は仰有いまして、而してあの、

お怪我を遊ばしますなツて、くれ／＼もね、可うご

ざんすか。」

といふより早く、身輕に一步退いて、立直つて一
 寸見た。が足も留めず、くるりとうしろ向くと、馬
 丁一人、大地に屈むで待つて居り、

「來たり、」と紫に紅ちらめく、白い足袋を揃
 へて抱く。上から又一人、指環を嵌めた其の手を取
 った、腰元の背は絲の如くによれて、頭の銀絲ゆら
 ／＼と、颯と赤らめた顔は摺硝子の中へ朧に消え込
 む、あたりに、梅の薫が残つた。

「萬歳々々、
 ー
 三國に、恁麼得意が又ある

か、何うだい、何うだい。」

と牛若は夢中になつて、傍に立つたものゝ袂を取つた。自ら獨り之を思ふに忍びなかつた。情熱が沸いたので、

「嬉しい、小氣味が可い、無法だ。こりや、身がうづく、撥つたい。」

とぢだんだを蹈んで、弗と見ると、自分が袂を控へたのは、思ひかけず女であつた。赤毛布を着た、投島田の。

これはと思つた、其の芙蓉の白面に、颯と紅を漲らして、衝と草鞋で前へ出たが、馬車の中を屹と見て、

「お待ちよ！」と肝の立つたる勇しい聲で、一寸、誰だか知らないが、一寸、神様のやうな眞似をするのね、何でも出来るかい。」と、朗かにいつた。何ものぞ、これ、誰か驚かざるべき。

わつと騒立つ人の動搖。風は軽く其横顔に鬢の毛を吹いた。搔拂はうとて傾けて首を振つた、艶姿一段、一步を進め、

「いろをんなは何うしたのさ、誰か其中から出て来ないか。金子ばかりぢや可けないんだよ、いろをんなも欲しいんだとき、よう、何うしたんだね。」

馬は空嘶してひづめを打つ。老將軍は御者臺に、高く蒼空を戴いて徒らに突立つのみ。

片頬に微笑んで、肯く状あり。

「ぢやあ一寸斷つて置きますよ、可いかい、私がいろになるが斷つて置くよ。」といひざまに、身を翻して猛に並んだ。

「可いかい、私がいろになるが可いかい、成つても可いかい。」

旅の女は、衝と来て猛の胸にひたと顔をあてると見た。毛布を刎ねると玉のやうな、細い手をしなやかに組んで、さしのべるが疾いか其の頸を抱いて、ぶら下るやうにした。氣は狂つても之を如何する。猛が突退けようとした兩手が、胸を押ししたので、身を反らして、仰向いた時、爪立つた足は地にもつかず、髪はがツくりとして櫛が落ちた。女の顔の色は

稍あをざめたが、接吻をしたのである。

途端に馬車は輾轉として過ぎた。渦になる人ごみの中へ、女の姿は隠れ去つた。

猛は膝を折つて、礎と地の上へ手をついて俯向いて了つたのである。驚倒したのはこの人ばかりでない。仙冠者はどつさり尻餅をついて、肩で呼吸をしながら、満面に大得意を顯して、

「大變だ、大變、もの事はすべて此處まで運んで来ようとは思はなかつた。何う為よう、こりや、ならぬ、耐つた譯のものでない、僕を何うしてくれるんだ。」

を見ると、立停つて、待ちつけて、

「番頭さん。」

老僕はのみ込んだ顔色で、

「え、金子の生る樹を御持ちなされたのは貴方でございますか。」と、慇懃に小腰を屈める。

猛がものをいふに先立つて、

「正に此人です、違ひません、此人ですよ。」

と、牛若引取つて挨拶する。

「新夫人御意にございます、何うぞ別荘までおいで下さいまし、手前お供をいたしまする。」

「へい、」馬丁もともに頭を下げた。

「僕に、」といった、猛は事の意外なるも、最早には然まで驚かないやうに、前刻から餘り吃驚して居る。

「行きたまへ、行きたまへ、君、敢て辭せず、唯今御同伴申します。私も御一所に、」

と牛若は獨合點、たゆたふ猛を引立てるやうにした。

記者ほど慌しい人はない。老僕は落着いて、其分
別ある目に牛若をつく／＼見たが、

「貴方は。」

「え、私の朋友だ。」

「へい。」

「信友だ、知己だ、極懇意。」と、憚るもので
はないことを、のみ込ませようとして、あらゆる親
密の間柄を表示する字を並べて言つた。

「新夫人は些少も貴方にはお傳言はございません
で、お一人お供をいたしまするやうな、仰せついで
ございましたでな。」

「けれども、信友です、些とも差しつかへないん
です。」

「いえ、何卒御一人、さあ御一所に。」
と促した。牛若は手持不沙汰。もし我に心を置い
て、何等か又新聞あるべき此行を猛が猶豫するなど
あつては、と抜目なく氣を着けて、

「君、ぢや行きたまへ、何を時踏する。」

猛はものをいふのに疲れて居たので、意を得て牛
若に目で答へた。

「さあ。」

「何卒。」

手を取るばかり、すると、猛は立直つた、背後に一人、新來の客あり。

「失禮、今しがた、旅の女が失禮をいたしましたのは貴方ではないのですか。」

と凜とした聲を懸ける。

振り返つて見ると、鍔廣の帽子を目深に、洋服を着て、脚絆、草鞋、すつくりと脊の高い、譬はゞ技師の如き装をした人物である。

「別儀はないのです、もしそれならば、女がお待ち申して居ります。」

と無造作にいつた。

牛若は逸早く猛の手を取つて、西、湖の方せむとするものを引向けて、此方に紹介した。

「参ります。此人です。確に此人です。参りませう。」

「何うぞ是非おいで下さい、御案内申しませう。失禮ですが、帽を取りません、御免下すつて、何うぞ。餘り人に見せたくない顔なんで、其をお嫌になるなら、少々困りますが、帽を取つてもお連れ申したい、如何でせう。」

好事な記者は益々得意になつて、
「勿論、何、もう、お使が首の無い人でも足さへ持つて被在しやれば、用は足ります。さあ、君、此方へ行き給へ、可いや、此方へ行くとしたまへ、これを又肯かなきあ、僕は決闘する。」

猛は人と天に任せて居るのである。些とも猶豫しなかつた。

「難有いな、此方の方へ。結構、さうあるべき事だ、難有い、其處で私ですが、」

「貴方は、」

牛若はさきに、信友知己懇意などゝいつて失敗したのに手懲をして居るので、ぬからず差心得。

「僕は、親類です、従兄弟、従兄弟も極の仲よし、兄弟、可けなけりや、親子、夫婦」一のやうなもので、お心置は些ともない。」と一等親になつて名告る。

「而して、」

と軽くおさへて、念を入れた。此方から先づ言はしめむとするやうなのは、先方に我を伴はむとする心のおつて存せざるを素疾く見抜いて、

「君は何うもお見受け申した處、権利のある人のやうだ、立派な方だ。事件の中の主人公のやうに見受けました。唯、さきからのいひつけがないとばかりで、私のいふことを消しますまい。お心持で何うにか出来さうな風采を持つてる、一面識の紳士、百年の知己のやうな氣がする朋友、貴方は何にあたります。」

とせはしないものゝいひやう。

帽ぼうの中から、屹きツと見た趣おもむきあつて、笑えみを洩もして
いた。

「然さやう、親類しんるゐです、從いと兄妹こどし同士、兄きやうだい妹まい、親おやこ子こ、
夫婦ふうふのやうなものです。」

「驚おどいた、同おなじことを、よく似にた身みの上うへですな。
兄きやうだい弟だい分の紳士セントルマン、何どうぞ僕ぼくも御ご一いつ所しよに願ねがひたい。」

「必要ひつえうがありませんから、」と旅客りよかくは打うつて變かは
つて、嚴酷げんこくな調子てうしで斥しりぞけた。

牛若うしわかは少すこしも怯ひるまず、

「尤もつとも必要ひつえうはありません、僕ぼく遂つひに何處どこへ行いつても
必要ひつえうであつた例ためしがない。事じ件けんに必要ひつえうな人ひとといへば、
先まづ君きみ、此處こゝに居ゐる此この學がく生せい、其その赤毛布あかげつとを着きたの、
新夫人しんふじん、まだノゝいくらもありませんが、僕ぼくは些ちつとも
必要ひつえうはない、又必要またやうひつえうな位置みちに立たたせられては、別べつに
大だい事じのある、僕ぼくには迷めい惑わく此上このうへもなしだ。」といひ
ながら、急いそいで手袋てぶくろを嵌はめた、其その美うつくしい掌てのひらをかへ
して見みせた。

「此の、をばさんにばかり僕は必要なんです、此人に逢ふために、僕は決して必要の位置を造らない。且つ又僕は凡て傍に立つて見るばかりで、自分の心持で事を左右しようなどゝは決して思はん。既に此人が馬車に轆かれようとした時も、見て居たばかり、轆殺されると其の通り報道する。又世に表して悪い事なら覚えて置いていはいはなればかりだ。僕は新聞記者です。」といつて、左手の手袋を脱して、美しい手を差し伸べた。

「失敬、お手を。僕の金打は此の手袋を脱ぐのが式だ。」

旅客は之を聞いて、唇邊に微笑して、齊しく其手を伸べて、互に握り動かした。牛若は又右手に取添へた、其の盟の手袋を勇しく。

【完】